

# 「修証義」より、現代の生活の指針となる生き方を語る副読本

80%  
縮小

今に生きる私たちの課題に「そ仏教の智慧を

(前略) 各節にふさわしい現代的な課題を取り上げ、そのこたえになりそうな仏陀の言葉や、道元禪師の言葉をまじえつつ、解消に視点を提示するように工夫しました。

曹洞宗の檀信徒の各位におかれましては、ご自分の具体的・現実的な問題意識から、不変な仏や祖師の言葉を読み取るというように、この副読本を読んでいただいたら、なによりの喜びでございます。

——「はじめに」より

## 第一章 総序——人間を照らす仏の真理

### 第一節 仏教のねらい (縁起・無常・無我・苦・露命、夢幻な自己存在に気付く)

生を明らめ 死を明らむるは 仏家一大事の因縁なり、生死  
「自己の生きている真実を明かし、死・命とは何かに法義をつけることは「仏教徒にとって二つことなり大切な修行のご機です。」「現実の  
の中に仏あれば生死なし、  
「生き死に。の中に仏の真理があるから、生き死に。を割り分けることはありません。」「損得抜きにこの 生き死に。の事実を都合を差し挟  
涅槃と心得て、 生死として厭うべきもなく、 涅槃として  
むことなく、「静寂な悟りの境である。心得て、苦しみ。生き死に。として分け出さなくてはなりません。」「かといつて、この人生がそ  
欣うべきもなし、是時 初めて生死を離るる分あり、  
のまま悟らだといつて、「善くも悪くもありません。」「そう腹が決まるとき、「はじめに 生き死に。といつたあたりを離れて、その人  
唯一大事因縁と究尽すべし。  
「ただただ、かけがえのない縁として腹を握るべきだものでもあります。」

#### 人生夢幻

「生死」は、人間の根元的な課題です。

現代では、「死」は、過剰医療の問題、つまり、終末期になって自力で食べられなくなったろうという、管を直接胃につないで高栄養な流動食を注入するという方法で、延命を図つた。によつては、脳機能が低下して、ほとんど自立した判断もできない状態でも、家族が「最善を尽くしてください」と要請するために、こうした処置をした結果、ほとんど人格が維持できなくなつても胃ろうを取り外すことができないと言つた状態が生じたりします。

こうした形でかえつて患者を苦しめ、家族を苦しめ、社会の医療資源を独占する結果になってしまいます。それは、自然な状態の死への道筋に対して、過剰で無制限な生への希求ばかりが生じてしまうためです。

そうした状況になつても、「自然の範囲」で、程よい努力をどのように実現するかという視点に、安定した心と患者・家族の関係性の構築が求められています。それによつて、自然な死への道筋に任せる智慧はどうしたら実現するかが、特に仏教徒には求められています。

\*

仏教は宇宙の基本的な真理を解明し、納得することで、現実の不条理を、後悔なく生きられるようにする、迷いの解消と考えます。

道元禪師の書かれた修証義の原文の傍らに、やさしい現代語訳を付した傍訳編集により修証義の内容が、格調高い原文とともに胸底にしみ入るように理解できます。